

魯班研究序説：中国古代中世における技術思想の伝 統

南澤，良彦
九州大学大学院人文科学研究院哲学部門

<https://doi.org/10.15017/26270>

出版情報：哲學年報. 72, pp.29-48, 2013-03-11. 九州大学大学院人文科学研究院
バージョン：
権利関係：

九州大学大学院人文科学研究院
『哲学年報』第72輯 抜刷
2013年3月発行

魯班研究序説

— 中国古代中世における技術思想の伝統 —

南 澤 良 彦

魯班研究序説

— 中国古代中世における技術思想の伝統 —

南 澤 良 彦

序

隋の宇文愷は隋代のみならず、中国史上最高の建築家の一人である。「巧思」⁽¹⁾を以て昇進を重ねるも、兄の罪に連座して没落する。再登用の経緯をその伝記は、「會朝廷以魯班故道久絶不行、令愷修復之。既而上建仁壽宮、訪可任者、右僕射楊素言愷有巧思。上然之、於是檢校將作大匠。(會たま朝廷魯班(の)故道久しく絶えて行はれざるを以て、愷に令して之を修復せしむ。既にして上仁壽宮を建てんとし、任すべき者を訪ぬれば、右僕射楊素愷に巧思有りと言ふ。上之を然りとし、是に於て將作大匠を檢校せしむ。)」⁽²⁾と記す。この後、宇文愷は再び累進して工部尚書にまで至り、技術系官僚の頂点を窮める。

さて、宇文愷再評価のきっかけを与えた「魯班故道」とは何であろうか。「故道」の語は一般的には、「旧来の道路」と解釈されるが、「かつて行われていた実践方法／流派」の意に取ることも可能である。したがって、「魯班故道」は、「魯班の造営した旧来の道路」と「魯班の創始した方法／流派」との両方の解釈ができるが、魯班に関する研究は十分ではなく、右の文脈だけでそのいずれかに決定することは困難である⁽³⁾。

魯班は中国科学技術史上、とりわけ技術の伝統の歴史に於いて極めて重要な人物であるにもかかわらず、彼が寡黙な技術家であるが故に、科学技術思想史研究に於いては不当に軽視されてきたと言わざるを得ない。しかしながら、中国科学技術思想の伝統を正しく理解するためには、科学思想にのみならず、技術思想の方面にも目を向けなくてはならない。「魯班故道」の四字の意味を判然とさせ、中国科学技術思想の脈脈たる伝統を解明するために、魯班についての丹念な考証が必要なのである。

本稿はまずその端緒として、魯班の事跡と伝承とを渉獵・整理しようとするものである^④。

一 魯班伝説の祖型

魯班は中国における伝説的工匠である。中国各地に彼が建立したとする伝説を有する建築物が多数存在し、また今日建築に不可欠の道具である物差・墨車・鑿鉋等の類は全て魯班の発明に係るとされており、往時は各地に廟や祠堂が設けられて折々に祭祀が捧げられ、今日なお活動を続けるものも少なくない^⑤。通説によれば、魯班は姓を公輸、名を班、尊称を公輸子と言うが、魯（今の山東省）の生れなので、魯班と通称され、また班と般・盤とが普通するところから、公輸盤・魯般・魯盤とも表記される。他に班輸の呼称も見られる^⑥。

魯班に関する伝承はその祖型を『墨子』魯問篇及び公輸篇に見出せる。魯問篇では、魯班はその発明品によって楚越の戦いで楚に勝利をもたらした立役者として登場する。原文を引用しよう。

昔者楚人與越人舟戰於江。楚人順流而進、迎流而退、見利而進、見不利則其退難。越人迎流而進、順流而退、見利而進、見不利則其退速。越人因此若執、亟敗楚人。公輸子自魯南游楚、焉始為舟戰之器。作為鉤強之備、退者鉤之、進者強之、量其鉤強之長、而制為之兵、楚之兵節、越之兵不節、楚人因此若執、亟敗越人。

（昔者楚人と越人と江に舟戦す。楚人流れに順ひて進み、流れに迎ひて退き、利を見て進むも、不利を見れば則ち其の退くこと難し。越人流れに迎ひて進み、流れに順ひて退き、利を見て進む、不利を見れば則ち其の退くこと速やかなり。越人此若の執に因り、しほ亟しは楚人を敗る。公輸子魯より南のかた楚に遊び、焉に始めて舟戦の器を為る。鉤強の備を作為し、退く者は之を鉤し、進む者は之を強し、其の鉤強の長を量りて、之が兵を制為すれば、楚の兵節し、越の兵節せず、楚人此若の執に因り、しほ亟しは越人を敗る。）

長江の流れに順行して攻撃する楚の水軍は、一旦戦況不利になると逆行しての退却が困難であったから、下流の越軍にその局面を衝かれてしばしば敗北を喫した。魯班は楚に味方して舟戦用の武器「鉤強」を發明し、彼等の勢力關係を一変させてしまう。

ところが、その手柄を自慢して墨子を揶揄したところ、魯班は逆に遣り込められてしまう。

公輸子善其巧、以語子墨子曰、「我舟戦有鉤強、不知子之義亦有鉤強乎。」子墨子曰、「我義之鉤強、賢於子舟戦之鉤強。我鉤強、我鉤之以愛、揣之以恭。弗鉤以愛、則不親、弗揣以恭、則速狎、狎而不親則速離。故交相愛、交相恭、猶若相利也。今子鉤而止人、人亦鉤而止子、子強而距人、人亦強而距子、交相鉤、交相強、猶若相害也。故我義之鉤強、賢子舟戦之鉤強。」

（公輸子其の巧を善くし、以て子墨子に語りて曰く、「我が舟戦に鉤強有るも、子が義にも亦鉤強有るやを知らず」と。子墨子曰く、「我が義の鉤強は、子が舟戦の鉤強に賢れり。我が鉤強は、我之を鉤するに愛を以てし、之を揣するに恭を以てす。鉤するに愛を以てせずんば、則ち親まず、揣するに恭を以てせずんば、則ち速かに狎れ、狎れて親まざれば則ち速かに離る。故に交ごも相ひ愛し、交ごも相ひ恭せば、猶ほ相ひ利す

るが若きなり。今子鉤して人を止めば、人も亦鉤して子を止め、子強して人を拒めば、人も亦強して子を距め、交ごも相ひ鉤し、交ごも相ひ強して、猶ほ相ひ害するが若きなり。故に我が義の鉤強は、子が舟戰の鉤強に賢れり」と。

魯班が墨子に対して義の話題を持ち出したのは、相手が悪かつたというほかない。
魯問篇にはこの後に有名な木製の風のエピソードが次のように記される。

公輸子削竹木以為鵠、成而飛之、三日不下、公輸子自以為至巧。子墨子謂公輸子曰、「子之為鵠也、不如匠之為車轄。須臾劉三寸之木、而任五十石之重。故所為功、利於人謂之巧、不利於人謂之拙。」^⑦
（公輸子竹木を削り以て鵠を為り、成りて之を飛ばせば、三日下らず、公輸子自ら以て至巧と為す。子墨子公輸子に謂いて曰く、「子の鵠を為るや、匠の車轄を為るにしかず。須臾にして三寸の木を劉して五十石の重を任ず。故に為す所の功、人に利する之を巧と謂ひ、人に利せざる之を拙と謂ふ」と。）

ここでも魯班はせっつかくの発明品を墨子に腐される。墨子にとって巧とは人間に利便性を与えるものでなければならず、自らを至巧と自負する魯班の自尊心は容赦なく挫かれる。

続く公輸篇では魯班は公輸盤とその名を示され、攻城兵器「雲梯」の発明者として描かれる。節を分けて見ることしよう。

公輸盤為楚造雲梯之械。成、將以攻宋。子墨子聞之、起於齊、行十日十夜而至於郢、見公輸盤。公輸盤曰、

「夫子何命焉為。」子墨子曰、「北方有侮臣、願藉子殺之。」子墨子曰、「請獻十金。」公輸盤曰、「吾義固不殺人。」子墨子起、再拜曰、「請說之。吾從北方、聞子為梯、將以攻宋。宋何罪之有。荆國有餘於地、而不足於民、殺所不足、而爭所有餘、不可謂智。宋無罪而攻之、不可謂仁。知而不爭、不可謂忠。爭而不得、不可謂強。義不殺少而殺眾、不可謂知類。」公輸盤服。子墨子曰、「然、乎不已乎。」公輸盤曰、「不可。吾既已言之王矣。」子墨子曰、「胡不見我於王。」公輸盤曰、「諾」。

（公輸盤楚の為に雲梯の械を造る。成りて、將に以て宋を攻めんとす。子墨子之を聞き、齊を起ちて、行くこと十日十夜にして郢に至り、公輸盤に見ゆ。公輸盤曰く、「夫子何の命かありて焉に為せる」と。子墨子曰く、「北方に臣を侮るもの有り、願はくは子に藉して之を殺さん」と。子墨子曰く、「請ふ十金を獻せん」と。公輸盤曰く、「吾義として固より人を殺さず」と。子墨子起ち、再拜して曰く、「請ふ之を説かん。吾北方從り、子の梯を為り、將に以て宋を攻めんとするを聞く。宋に何の罪か之有らん。荆國地に餘有りて民に足らず、足らざる所を殺して餘有る所を争ふは、智と謂ふべからず。宋に罪無くして之を攻むるは、仁と謂ふべからず。知りて争はざるは、忠と謂ふべからず。争ひて得ざるは強と謂ふべからず。義として少を殺さずして眾を殺すは、類を知ると謂ふべからず」と。公輸盤服す。子墨子曰く、「然らば、乎ぞ已めざるか」と。公輸盤曰く、「可ならず。吾既已に之を王に言ふなり」と。子墨子曰く、「胡ぞ我を王に見えしめざる」と。公輸盤曰く、「諾なり」と。）

魯班が雲梯を發明し宋へと進軍しようとするや、それを聞きつけた墨子は楚の首都郢に駆けつけ、魯班にその戦争の不義を説く。魯班は墨子の説得にたちまち納得し、攻撃中止のために楚王との会見の斡旋を約束する。

子墨子見王、曰、「今有人於此、舍其文軒、鄰有敝輦、而欲竊之、舍其錦繡、鄰有短褐、而欲竊之、舍其梁肉、鄰有糠糟、而欲竊之。此為何若人。」子墨子曰、「荆之地、方五千里、宋之地、方五百里、此猶文軒之與敝輦也。荆有雲夢、犀兕麋鹿滿之、江漢之魚鱉鼃鼉為天下富、宋所為無雉兔狐狸者也、此猶梁肉之與糠糟也。荆有長松・文梓・楸・豫章、宋無長木、此猶錦繡之與短褐也。臣以三事之攻宋也、為與此同類、臣見大王之必傷義而不得。」王曰、「善哉。雖然、公輸盤為我為雲梯、必取宋。」

(子墨子王に見えて曰く、「今此に人有り、其の文軒を捨て、鄰に敝輦有りて之を竊まんと欲し、其の錦繡を捨て、鄰に短褐有りて之を竊まんと欲し、其の梁肉を捨て、鄰に糠糟有りて之を竊まんと欲せば、此を何若なる人と為すか」と。子墨子曰く、「荆の地は、方五千里、宋の地は、方五百里、此猶ほ文軒の敝輦とのごときなり。荆に雲夢有り、犀兕麋鹿之に滿ち、江漢の魚鱉鼃鼉を天下の富と為せば、宋の為す所雉兔狐狸無き者なり、此猶ほ梁肉の糠糟とのごときなり。荆に長松・文梓・楸・豫章有り、宋に長木無し、此猶ほ錦繡の短褐とのごときなり。臣以らく三事の宋を攻むるや、此と同類を為し、臣大王の必ず義を傷ひて得ざるを見る」と。王曰く、「善きかな。然りと雖も、公輸盤我が為に雲梯を為り、必ず宋を取らん」と。)

墨子は楚王の前に饒舌に荆(楚)と宋との国力の差を述べ、楚の宋を攻める不義を説く。しかし楚王は納得せず、魯班の雲梯の実戦での活躍への期待の念を隠さない。

於是見公輸盤、子墨子解帶為城、以牒為械。公輸盤九設攻城之機變、子墨子九距之、公輸盤之攻械盡、子墨子之守圉有餘。公輸盤詰、而曰、「吾知所以距子矣、吾不言。」子墨子亦曰、「吾知子之所以距我、吾不言。」楚王問其故、子墨子曰、「公輸子之意、不過欲殺臣。殺臣、宋莫能守、可攻也。然臣之弟子禽滑釐等三百人、

已持臣守圍之器、在宋城上而待楚寇矣。雖殺臣、不能絶也。」楚王曰、「善哉。吾請無攻宋矣。」⁽⁸⁾

(是に於て公輸盤に見え、子墨子帶を解きて城と爲し、牒を以て械と爲す。公輸盤九たび攻城の機變を設け、子墨子九たび之を距し、公輸盤の攻械盡き、子墨子の守圍餘有り。公輸盤誦して曰く、「吾子を距する所以を知るも、吾言はざらん」と。子墨子も亦曰く、「吾子の我を距する所以を知るも、吾言はざらん」と。楚王其の故を問へば、子墨子曰く、「公輸子の意、臣を殺さんと欲するに過ぎず。臣を殺さば、宋能く守る莫く、攻むべきなり。然るに臣の弟子禽滑釐等三百人、已に臣が守圍の器を持して、宋城上に在りて楚寇を待つなり。臣を殺すと雖も、絶する能わざるなり」と。楚王曰く、「善きかな。吾請ふらくは宋を攻むること無からんことを」と。)

シミュレーションとはいえ、魯班と墨子とはついにそれぞれの発明品を以て戦火を交えた。結果は魯班の九戦九敗、その攻城兵器雲梯は墨子の守備を突き崩せなかつたのである。悔し紛れに墨子の殺害をほめかす魯班だが、墨子は拔かりなく万全の体制を取っていることを告げ、楚王は宋攻撃を断念する。魯班の完敗である。

『墨子』では、魯班は偉大な発明家というよりも、次々に珍妙な発明を練り出してはその度ごとに常に墨子にその上を行かれて膝を屈する道化役を演じている。もとより『墨子』の主眼は魯班の発明の偉大さを説くことではなく、墨子の内面的奥深さを語ることにあり、発明品はそれが巧緻であればあるほど、却つて墨子の利口さを引き立てる役割を果たすばかりで、その技巧としての価値は顧みられない。

しかしながら、『墨子』の著者の意図とはうらはらに、狡智に長けた墨子との対照によって、魯班はお人好しの大発明家(巧匠)という愛すべきキャラクターに造型され、その許多の魅力的な発明品と共に後世に伝承されるのである。

二 魯班伝説の異本と展開

魯班の発明品のうち、鉤強は、『墨子』以降伝承されない。一方、木製の鵲と雲梯とは後世人口に膾炙する。木製の鵲の伝説はとりわけ大空を飛翔する爽快なファンタジーの色彩を帯び、後世において好まれた魯班の発明品の一つであり、『淮南子』齊俗訓にも、「魯般・墨子以木為鳶而飛之、三日不集。（魯般・墨子木を以て鳶を為りて之を飛ばせば、三日集らず。）」⁹と言及する。鳥の種類は鵲ではなく鳶であり、魯班だけではなく墨子の名も挙がっているが、漢代の王充（二七―一〇一?）の『論衡』儒増篇の中にも、同様の記載がある。また木鳶に関連して別の発明品も記される。すなわち、木車馬である。引用しよう。

儒書稱、「魯般・墨子之巧、刻木為鳶、飛之三日而不集。」（中略）猶世傳言曰、「魯般巧、亡其母也。」言巧工、為母作木車馬・木人御者、機關備具、載母其上、一驅不還、遂失其母¹⁰。

（儒書に稱すらく、「魯般・墨子の巧、木を刻んで鳶を為り、之を飛すこと三日なるも集らず」と。（中略）猶ほ世傳の言に曰く、「魯般巧なるも、其の母を亡ふなり」と。言ふところは巧工、母の為に木車馬・木人御者を作り、機關備ねく具はり、母を其の上に載せ、一たび驅して還らず、遂に其の母を失ふ。）

木車馬は機関は完全ながら、引き返す機能を付け忘れ、片道切符の旅に母を出してしまった。大発明でありながら使い道に困るこの機械はいかにも魯班らしい発明品である。

雲梯を伝承するものには他に、秦代の『呂氏春秋』（愛類篇）、漢代の『淮南子』（脩務訓）がある。いずれも同工異曲で、『墨子』の物語の異本という風情である。『墨子』では魯班は、墨子の立場からその引き立て役として描かれているが、『呂氏春秋』や『淮南子』でもその傾向にある。

戦国諸子では儒家の『孟子』や『荀子』、道家の『列子』が魯班に言及する。『孟子』（離婁章句上）では、

離婁之明・公輸子之巧、不以規矩、不能成方員。師曠之聰、不以六律、不能正五音。堯舜之道、不以仁政、不能平治天下。今有仁心仁聞而民不被其澤、不可法於後世者、不行先王之道也¹¹。

（離婁の明・公輸子の巧ありても、規矩を以てせざれば、方員を為す能はず。師曠の聰ありても、六律を以てせざれば、五音を正す能はず。堯舜の道ありても、仁政を行はざれば、天下を平治す能はず。今仁心仁聞有りても民其の澤を被らず、後世に法すべからざる者、先王の道を行はざればなり。）

と記され、魯班は、同じく卓越した技能者である離婁や師曠と共に、堯舜の道德政治の要諦を理解させるための分かり易い譬喩として使われる。

『荀子』（法行篇）でも、

公輸不能加於繩墨、聖人不能加於禮。禮者、眾人法而不知、聖人法而知之¹²。

（公輸も繩墨に加ふる能はず、聖人も禮に加ふる能はず。禮なる者は、眾人法りて知らず、聖人法りて之を知る。）

と記され、魯班は技術の粋を極めた者として、徳を極めた聖人に対する譬喩として使われる。

道家思想では、『列子』（湯問篇）に、偃師が精巧な人造人間を創造し、周の穆王に「人之巧乃可與造化者同功乎。（人の巧は乃ち造化者と功を同じくすべきか。）」¹³と絶讃された話を承けて、

夫班輸之雲梯、墨翟之飛鳶、自謂能之極也。弟子東門賈・禽滑釐、聞偃師之巧、以告二子、二子終身不敢語藝、而時執規矩¹⁴⁾。

(夫れ班輸の雲梯、墨翟の飛鳶、自ら能く之を極むと謂ふなり。弟子東門賈・禽滑釐、偃師の巧を聞き、以て二子に告ぐれば、二子終身敢て藝を語らずして時に規矩を執るのみ。)

と記される。魯班(及び墨子)は偃師の登場により第二位の技術者の座に甘んじた恰好だが、この逆転劇が効果的な印象を与えるとしたら、それは、魯班が最高の技術者だと認識されていたからであろう。

三 魯班への評価と神格化

『墨子』を祖型として、秦漢時代に魯班は至高の技術の代名詞となるが、技術は往往にして精神的営為の譬喩乃至は斲の枕であり、技術自体が評価の対象となることは稀であった。ただし、漢代の知識人たちが魯班の発明家としての偉大さを譬喩に用いるとき、そこには儒学者の説教臭さや道家思想家の超俗のポーズは感じ取れない。幾つか例を挙げよう。

王褒(紀元前一世紀頃)の「四子講徳論」の用例。

夫特達而相知者、千載之一遇也。招賢而處友者、衆士之常路也。是以空柯無刃、公輪不能以斲。但懸曼嬾、蒲直不能以射。故膺騰撤波而濟水、不如乘舟之逸也。衝蒙涉田而能致遠、未若遵塗之疾也。才蔽於無人、行衰於寡黨、此古今之患、唯文學慮之¹⁵⁾。

(夫れ特達して相ひ知る者は、千載の一遇なり。賢に招いて友に處らす者は、衆士の常路なり。是を以て空

柯無刃なれば、公輸も以て斲る能はず。但だ曼矰を懸くるのみなれば、蒲苴も以て射る能はず。故に膺騰して波を撇ひて水を濟るも、舟に乗るの逸きに如かざるなり。衝蒙して田に涉りて能く遠くを致すも、未だ途に遵ふの疾きに若かざるなり。才は人無きに蔽はれ、行は黨寡きに衰ふるは、此れ古今の患、唯だ文學のみ之を慮るのみ。）

王褒は字を子淵と言い、蜀（今の四川省）の人、前漢宣帝期に活躍し、文學を以て榮達し諫大夫にまで至った。『漢書』卷六四下に本伝がある。「四子講徳論」は人材を得る要諦を論じた文章。「空柯無刃、公輸不能以斲。（斧のない斧の柄には刃が無いのだから、魯班でさえも（木材を）斲ることは出来ない。）」の二句は、適切な手段がなければ、良い人材を得ることは出来ないことの譬喩である。魯班は木鵲（木鳶）・木車馬を發明した。そこからの發想であろう。

班固（三二～九二）の「擬連珠」の用例。

臣聞公輸愛其斧。故能妙其巧。明主貴其士。故能成其治。臣聞良匠度見材而成大廈。明主器其士而建功業¹⁶。（臣聞く公輸は其の斧を愛す。故に能く其の巧に妙たり。明主は其の士を貴ぶ。故に能く其の治を成す。臣聞く良匠は見材を度して大廈を成す。明主は其の士を器として功業を建つ。）

班固は字を孟堅と言い、安陵（今の陝西省咸陽）の人。『漢書』の著者として有名であり、學術全般に通じた。『後漢書』列伝三〇に本伝がある。「擬連珠」は連珠体の文学作品の最高峰と言われる。「公輸愛其斧。故能妙其巧。（魯班は自分の道具である斧を愛したから、巧妙な技術を發揮できた。）」の二句は、対句になっている後ろ

の二句「明主貴其士。故能成其治。(優れた君主は自分の道具である家臣を尊重したから、政治を成功できた。)」の譬喩である。後半の良匠も魯班を指す。魯班が現有の材料から高層建築を完成させたように名君は現有の家臣を材料にして功業を打ち立てる。魯班が最高の建築家として認識されていたことが分かる。

傳毅(？～九二?)の「琴賦」の用例。

歷嵩岑而將降、睹鴻梧於幽阻。高百仞而不枉、對脩條以持處。蹈通涯而將圖、遊茲梧之所宜。蓋雅琴之麗樸、乃升伐其孫枝。命離婁使布繩、施公輸之剖劂。遂彫琢而成器、揆神農之初制。盡聲變之奧妙、抒心志之鬱滯¹⁷。(嵩岑を歴して將に降らんとして、鴻梧を幽阻に睹る。百仞を高しとして枉げず、脩條に對し以て處を持す。通涯を蹈んで將に圖かんとし、茲の梧の宜しき所に遊ぶ。蓋し雅琴の麗樸、乃ち升りて其の孫枝を伐たん。離婁に命じて繩を布かしめ、公輸の剖劂を施す。遂に彫琢して器と成し、神農の初制を揆す。聲變の奧妙を盡くし、心志の鬱滯を抒す。)

傳毅は字を武仲と言ひ、扶風茂陵(今の陝西省西安)の人。蘭臺令史・郎中を歴任し、班固・賈逵と共に宮中圖書の整理を行った。『後漢書』列伝七〇上文苑伝中に本伝がある。「琴賦」は古代の名器である雅琴について述べた作品である。「命離婁使布繩、施公輸之剖劂。(離婁に命じて琴の原木に墨繩を当てさせ、魯班に彫刻刀で雕琢させる。)」の二句は譬喩ではない。離婁は前節で見た『孟子』離婁篇に魯班と並んで登場する人物で拔群の視力の持ち主である。傳毅は雅琴の製作過程を記して、その名器たる所以を魯班の雕琢に置いた。この措辞が説得力を持つのは、魯班を最高の工匠とする認識が社会の常識になっていたからであろう。

なお、『禮記』檀弓篇に『墨子』系統と別の伝承が見える。すなわち、

季康子の母死。公輸若方小。斂、般請以機封。(季康子の母死す。公輸若方小なり。斂するとき、般機を以て封ぜんことを請ふ。)

という一節である。

魯の三桓の一つ季孫氏の一人である季康子の母が死んだとき、まだ幼少の公輸若に代わつて魯班が埋葬時に棺(死者を直接納める棺)を槨(外側の棺)に下ろし入れる斂という作業を執り行つた。魯班はその斂に機封という仕掛を使おうとしたのである。

これに後漢の鄭玄(一二七〜二〇〇)は簡潔ながらも必要十分な注解を施す。

公輸若、匠師。方小、言年尚幼、未知禮也。斂、下棺於槨。般、若之族、多技巧者。見若掌斂事而年尚幼、

請代之而欲嘗其技巧¹⁸⁾。

(公輸若は、匠師なり。方小は、言ふこころ年尚ほ幼く、未だ禮を知らざるなり。斂は、棺を槨に下すなり。

般は、若の族にして、技巧多き者なり。若の斂事を掌るも年尚ほ幼きを見て、之に代ることを請ひて其の技巧を嘗みんと欲す。)

鄭玄には魯班の一族の系譜やそれが工匠の家系であり、魯班が機巧の試作に熱心だったこと等の知識があったのである。鄭玄は山東高密(今の山東省高密)の人で、魯の魯班と同じ山東省の出身であるから、他の地方の人よりも魯班に関して豊富な知識があったと思われる。

魏晋以降に於いては、正史の中に方技伝・方術伝・芸術伝等の名称で科学技術者を網羅した列伝のジャンルが設けられるようになったことから窺えるように、社会に於ける技術及び技術者の地位は次第に高まり、卓越した技術者は知識人から正当に評価されるようになった¹⁹⁾。魯班は科学技術の中の「機巧・巧思」すなわち発明の才能というジャンルの嚆矢の一人とされ、神格化されるようになった。用例を二つ挙げよう。

南齊の崔元祖（五世紀頃）の「請留蔣少游啓」の用例。

少游、臣之外甥、特有公輸之思。宋世陷虜、處以大匠之官。今為副使、必欲模範宮闕。豈可令氈鄉之鄙、取象天宮。臣謂且留少游、令使主反命²⁰⁾。

（少游は、臣の外甥にして、特に公輸の思有り。宋の世に虜に陥り、處るに大匠の官を以てす。今副使と為るは、必ず宮闕を模範せんと欲せばなり。豈に氈郷の鄙に令して、象を天宮に取るべけんや。臣謂らく且く少游を留め、使主に令して反命せしめん。）

崔元祖は南齊の人、崔祖思の子、学問德行共に優れ、文章が上手かった。『南史』卷四七崔祖思伝に附伝される。右の手紙は甥の蔣少游が北魏の副使として南齊に来たときのもので、『南齊書』の本文には、「少游有機巧。」²¹⁾とある。「公輸之思」は「機巧」と同義語であり、魯班が機巧（巧思）の代名詞となっていたことが分かる。魯班はもはや具体的な生身の人間ではなく、抽象化された記号的存在なのである。

梁の蕭統（五〇一〜五三二）の「銅博山香鑪賦」の用例。

稟至精之純質、産靈岳之幽深。經般倅之妙旨、運公輸之巧心⁽²²⁾。

(至精の純質を稟けて、靈岳の幽深に産す。般倅の妙旨を經み、公輸の巧心を運らす。)

蕭統は梁の昭明太子、『文選』の編者として有名である。『梁書』卷八に本伝がある。この賦は博山香炉の名品を述べたもので、その製作過程で「公輸之巧心」が関わるのだ。「公輸之巧心」は巧思の謂いであり、魯班の属性が記号となっているから、読者にその銅博山香炉の巧緻さが伝わるのである⁽²³⁾。

兩漢時代には、魯班は持てる能力の至高さを表現する分かり易い譬喩として用いられることが多かった。やがて魏晋南北朝時代になると、科学技術(者)自体の社会的地位が向上して、譬喩という脇役から主体的な評価の対象に転じたことにより、伝説的な超絶的技巧を有する魯班は抽象化・神格化され、機巧・巧思の記号となったのである。

四 魯班の異なる伝承

前節までで戦国時代から南北朝時代までの魯班に関する伝承を概観した。本節では、全く新たな伝承を紹介しよう。それは唐の段成式(？～八六三)が『酉陽雜俎』に記した伝承である。

今人每睹棟宇巧麗、必強謂魯般奇工也。至兩都寺中、亦往往托為魯般所造、其不稽古如此。據『朝野僉載』云、「魯般者、肅州敦煌人、莫詳年代、巧侔造化。於涼州造浮圖。作木鳶、每擊楔三下、乘之以歸。無何、其妻有妊、父母詰之、妻具說其故。父後伺得鳶、擊楔十餘下乘之、遂至吳會⁽²⁴⁾。吳人以為妖、遂殺之。般又為木鳶乘之、遂獲父屍。怨吳人殺其父、於肅州城南作一木仙人、舉手指東南、吳地大旱三年。荀曰般所為也、賫物

具千數謝之、般為斷一手、其日吳中大雨。國初、土人尚祈禱其木仙。」六國時公輸般亦為木鳶以窺宋城²⁵。

（今人棟宇の巧麗を睹る毎に、必ず強く魯般の奇工と謂ふなり。兩都の寺中に至り、亦往往にして托して魯般の造る所と為すも、其の古を稽えざること此くの如し。『朝野僉載』に據りて云く、「魯般なる者は、肅州敦煌の人、年代を詳らかにする莫きも、巧は造化に侔し。涼州に於いて浮圖を造る。木鳶を作り、楔を撃つこと三下毎に、之に乗り以て歸る。何くも無くして、其の妻奸る有り、父母之を詰せば、妻具さに其の故を説ふ。父後伺ひて鳶を得、楔を撃つこと十餘下之に乗り、遂に吳會に至る。吳人以て妖と為し、遂に之を殺す。般又木鳶を為りて之に乗り、遂に父の屍を獲たり。吳人其の父を殺すを怨み、肅州の城南に於いて一木仙人を作り、手を舉げて東南を指せば、吳地大旱すること三年。荀して般の為す所なりと曰ひ、賫物千數を具へて之に謝するに、般為に一手を斷せば、其の日吳中大いに雨ふる。國初、土人尚ほ其の木仙に祈禱す。」と。六國の時の公輸般も亦木鳶を為り以て宋城を窺へり。）

段成式は晩唐の文人。字を柯古と言ひ、齊州臨淄（今の山東省淄博市）の人。咸通初年（八六〇）、江州刺史を解任されてから悠悠自適の生活を送り、家にたくさんあつた書物に読み耽り、特に仏典を愛好した。『舊唐書』卷一六七・『新唐書』卷八九に本伝がある。『西陽雜俎』は神話伝説・靈驗奇習等を分類収録した隨筆。『朝野僉載』は唐の張鷟の撰。初唐・盛唐期の怪奇な出来事を記した書物、ただし右の話は今本にはない。

『西陽雜俎』（『朝野僉載』）に載る魯班伝承は実に面白いが、それまでと異なる新要素は、木鳶を巡る一連の騒動を描いた話を除く他には、

1. 魯班が唐代の建築物、殊に長安・洛陽兩都の寺院の建立に関わること。
2. 魯班が魯（山東省）ではなく、敦煌（甘肅省）の出身だということ。

3. 魯班が涼州（甘肅省）に浮圖（仏塔）を造営したこと。
 4. 魯班が父の復讐を行ったこと。
 5. しかも相手が赦しを請うとそれを許したこと。
 6. 魯班（魯般）と公輸般とは別人の可能性があること。
- 等が挙げられる。これらは九世紀になって突如として知識人の著作に記された新要素であるが、文字資料になかっただけで、民間伝承としては存在していたに違いなく、後世多数生まれる魯班伝説に深い影響を与えた。

結 語

魯班は類い稀なる機巧（巧思）の才に恵まれた工匠（巧匠）であった。実在の人物でありながら、鮮やかな手並みで次から次へと発明を繰り出すさまは、あたかも神話上の文化英雄のごとく、しかもそれらの発明品は決して荒唐無稽ではなく、理に適っていた。科学技術の粋を集めることで却って人智を越えたその痛快さに、人人は魅了され、彼の伝説を拡大再生産して後世へと語り継ぐようになる。その結果、魯班は、時代を超越して中国のあちこちの場所に出現しては人人の耳目を驚かす発明を行い、或いは歴史的建造物に名を留めることになったのである。

歴史上の人物としての魯班が生まれた戦国時代から宇文愷の活躍する隋代に至るまでの十世紀近い年月の間に、魯班に関する実に雑多な伝承が生まれ、応接に暇がない程であり、本稿では特徴的なものの一部を検討するに留まった。ただ、管見の及ぶ限り、史実に於いても伝承に於いても、魯班が建設した道路は見当たらない。他方、魯般が卓越した技法を發揮したことは明白な事実である。したがって、「魯班故道」とは魯班の建設した旧道の意味ではなく、田中淡氏が推論されるように、「魯班の旧技法」の方向に解釈するのが妥当であろう。魯般の技

法は子孫や弟子たちに継承されたであろうから、「魯般派の流儀」と踏み込んで解釈しても良からう。

「魯班故道」の四字の意味するところが判然とし、本稿の目的の一つは達成された。しかしながら、唐代以降の文献所載の魯班伝承については、前節に引用した『酉陽雜俎』所引の魯班伝承以外には何ら述べることもなかった。それらの検討は「魯班仙師源流」に帰結する民間伝承系統²⁶及び道教系統²⁷の魯班伝承の検討とともに今後の課題としたい。予断を許されるなら、近世以降出現する『魯班經』や魯班廟に表現された理論体系から推測すれば、宇文愷によって修復された魯般派の流儀は、単に魯般のテクニクだけではなく、魯般の（乃至は魯般に仮託された）技術思想をも包含して継承発展され、中国科学技術思想の脈脈たる伝統の流れの一つを形成する、という見通しを提示しておこう。

注

- (1) 巧思については、南澤良彦「張衡の巧思と『應問』」(日本中国学会『日本中國學會報』第四八集、一九九六年)を参照。
- (2) 〔唐〕魏徵・令狐德棻『隋書』卷六八宇文愷傳(北京、中華書局、一九七八年)、一五八七〜一五八八頁。
- (3) 田中淡『中国建筑史の研究』(東京、弘文堂、一九八九年)は「魯班故道」を「魯班の旧技法」と訳し、「ここに魯班故道の修復というのは、今日的にいえば、伝統的建築技法の活用と後世への伝承のための復元考証・編纂に相当するものとおもわれる。」(二二三頁)と推論する。また、『隋書』宇文愷傳(一五九九頁)の史臣評「宇文愷學・藝兼該、思・理通瞻、規矩之妙、參蹤班・爾。(宇文愷學・藝兼該して、思・理通瞻し、規矩の妙は、班・爾に參蹤す。)」について、田中淡前掲書は、「班・爾はそれぞれ魯班・王爾のこと。……ここでは二人によって古の巧匠の技法を代表させたものとみられる。」(二八〇頁)と推論する。ただし、田中氏には魯班の専門的研究はなく、これらの推論は検証の必要がある。
- (4) 魯班の科学技術史的研究には、森鹿三「公輸子に關する二三の說話」(京都大学人文科学研究所『東方學報』(京都) 第二一冊、一九五二年)がある。また、魯班の伝説については、松本民雄「北京の仏塔伝説―魯班伝説に關して」(北海道東海大学『北海道東海大学紀要 人文社会科学系』第三号、一九九〇年)、寺本健三「中国のダイダロス―魯般伝説の伝播」(史迹美術

同致会『史迹と美術』第八〇〇号、二〇〇九年）がある。なお、中国での魯班に関する主要な論文は『魯班研究文集』（北京、中国社会科学出版社、二〇一一年）に網羅される。

(5) 現存する最大の魯班廟は台湾台中東勢にある。香港と天津薊県とにあるものと合わせて三大魯班廟と称される。

(6) 魯班の様々な呼び名については、〔清〕梁玉繩『人表考』巻五を参照。

(7) 以上、〔戦国〕墨翟『墨子』魯問第四九、〔清〕孫詒讓『墨子問詁』巻一三（北京、中華書局、一九八六年）、四四〇～四四二頁。

(8) 以上、『墨子』公輸第五〇、『墨子問詁』巻一三、四四三～四四九頁。

(9) 〔前漢〕劉安『淮南子』齊俗訓、劉文典『淮南鴻烈集解』巻二一（北京、中華書局、一九八九年）、三六九頁。

(10) 〔後漢〕王充『論衡』儒增、黃暉『論衡校釋』巻八（北京、中華書局、一九九〇年）、三六五頁。

(11) 〔戦国〕孟軻『孟子』離婁上、『孟子注疏』巻七上、〔清〕阮元『十三經注疏』（北京、中華書局、一九八七年）、二七一七頁。

(12) 〔戦国〕荀況『荀子』法行、〔清〕王先謙『荀子集解』巻二〇（北京、中華書局、一九八八年）、五三三頁。

(13) 〔戦国〕列禦寇『列子』湯問、楊伯峻『列子集釋』巻五（北京、中華書局、一九七九年）、一七九頁。

(14) 『列子』湯問、一八一頁。

(15) 〔前漢〕王褒『四子講德論』、〔梁〕蕭統編〔唐〕李善注『文選』巻五一（北京、中華書局、一九七七年）、七二二頁。

(16) 〔後漢〕班固『擬連珠』、〔唐〕歐陽詢『藝文類聚』巻五七（北京、中華書局、一九六五年）、一〇三六頁。

(17) 〔後漢〕傅毅『琴賦』、『藝文類聚』巻四四、七八三頁。

(18) 以上、『禮記』巻一〇檀弓下、『十三經注疏』本、一三二〇頁。

(19) 魏晋から隋唐にかけての技術者の地位向上については、注（1）所掲南澤論文を参照。

(20) 〔梁〕蕭子顯『南齊書』巻五七魏虜傳（北京、中華書局、一九七四年）、九九〇頁。

(21) 同右。

(22) 〔梁〕蕭統『銅博山香鑪賦』、『藝文類聚』巻七〇、一二二二頁。

(23) 般倭は魯般と倭。倭は古代の伝説的工匠、『尚書』堯典には「垂」として、『莊子』胠篋篇には「工倕」として、『楚辭』九章・懷沙には「巧倕」として登場する。この二句には、（魯）般と公輸との両方が出現しており、魯班・公輸班別人説の根拠の一つだが、この問題は複雑なので、今後の課題とし本稿ではしばらく措く。

(24) 「撃楔」は木鳶にクサビを撃ち込むことであろう。「三下」「十餘下」の「下」はその回数で、どういう仕組みか分からないが、三回撃ち込むと木鳶に魯まで飛ぶ力が加わり、十回余り撃ち込むと三回の三倍以上の力が加わって遥か遠くの呉會まで飛

んで行ったのである。

(25) 〔唐〕段成式『酉陽雜俎』續集卷四、『文淵閣本四庫全書』六丁～八丁。

(26) 「魯班仙師源流」は〔明〕午榮・章嚴・周言『新鐫工師雕斲正式魯班經匠家鏡』の卷頭に収録される。なお、同書は、沈聿之「魯班經提要」〔『中國科學技術典籍通彙』技術卷第二卷「魯班經」、鄭州、河南教育出版社、一九九四年、三七五頁〕に、「以明代民間建築木工口訣傳抄本《魯班營造正式》為基礎、增加了明代家具、日用器物、涉及建築施工的秘書、真言、咒符等內容集編而成。（明代の民間に行われた建築木工の口訣の伝抄本『魯班營造正式』を基礎として、明代の家具・日用の道具及び建築施工の秘伝書・呪文・まじない等の内容を増加して編集して出来ている。）」と紹介される書物である。

(27) 道教では、魯班は仙人に叙せられる。例えば、〔梁〕陶弘景「真靈位業圖」では地仙散位に「赤魯班」としてその名が見える。陶弘景は「即黃初起也。」と注する。黃初起とは、黃初平こと赤松子の兄のことである。

付記 本研究はJSPS科研費23520056の助成を受けたものです。